

川市から北は脊振山地の県境に及び、西南は六角川対岸の杵島郡白石、福富町に達し、その影響圏はさらに拡大して、佐賀、白石両平野は言うまでもなく、おおむね有明海に注ぐ河川の分水界と一致するが、地区的にはこれを超越して東松浦郡厳木町及び相知町、柳川市の一部をも包含している。その領域を面積で示すと、県内だけでもその勢力圏は約八百平方キロメートルで県面積の三分の一、影響圏まで加えると約千五百平方キロメートルで、県面積の三分の二を占めている。したがって今後の佐賀市の発展には、やがて重大化する食糧基地としての佐賀平野の中心的位置に立脚する「豊かで住みよい田園都市」的性情を基調として、交通の整備を進め県都としての管理機能の集中拡大と文化施設の充実、商工業の発展を計ることが大切であろう。

注

- ① 二―(一)「はじめに」参照
 ② 二―(二)―2参照、国道三四号線は県庁前を通る通称「貫通道路」の東西延長線、以下同じ。

二 佐賀平野の成り立ち

(一) 脊振山地と佐賀平野

はじめに

佐賀平野は九州最大の筑紫平野の西半を占め、筑後川下流以西の佐賀県側の平野を言う。ほとんど低平肥沃な沖積平野で、わが国屈指の米作地帯として知られ、佐賀県産米の約七〇パーセントはこの平野で産出される。この平野は地域的に、筑後川と六角川間を佐賀平野（狭義）と呼び、六角川と塩田川間を白石平野または白石地方と言う場合がある。おのおの平野を構成する土質の相異、雨量の多寡、開発の社会的、歴史的環境の相異などからくる特色を備えている。例えば景観的にも、狭義の佐賀平野が、網状に発達した溝渠（俗称堀、最近はクリーク）とこれに依存する水稻栽培、佐賀市をはじめとする都市と集村の発達が目立っているのに対して、白石平野は溜池と井水灌漑の卓越、重粘な埴土と連根栽培の繁栄、疎集村と散村形態が目立っている。ところで佐賀市の歴史は、大局的には日本歴史の潮流を背景として、近隣地域と密接な有機



晩秋の佐賀平野と天山の遠望

的関連の下に展開したことは言うまでもないが、佐賀市の歴史的發展の舞台としての地理的環境は、便宜上佐賀市を中心とする狭義の佐賀平野に集約して述べることにする。

1 脊振山地

佐賀市の北に屏風を立てたように見える脊振山地は、筑紫山地の西部延長で、主峰脊振、天山ともに千メートルをわずかに越えるにすぎない。この山地はほとんど花崗岩からなる断層山地であるが、この花崗岩は中生代の末期約一億年前、地下の深所で生成した火成岩が、その後地殻の変動により隆起して山地を形成したもので、脊振山地と佐賀平野とを画する中央構造線の西部延長すなわち松山伊万里線も、この地質時代に生じたものと考えられる。

この山地には無数の断層に沿って深い谷が走り、高原状のなだらかな山頂が各地に見られるところから、地形学的には隆起準平原と考えられ、また、山地の南麓には県下でも古い地層である古生層が、帯隈・日の隈・旭山などの丘陵としてわずかに残っている。これらことから考えると、現在の脊振山地は、侵食の輪廻^{りんね}の終末期である準平原化した古生層山地の下から、花崗岩が隆起して地表の山地となり、さらにこの花崗岩山地が、長年月の間侵食を受け、準平原の段階にまで削平されて

後、再び内因的営力により隆起して、今日の山容を呈しているものと考えられる。

この山地には無数の断層があり、川上川、城原川その他の細流と道路は、おおむねこの断層線に沿っている。山間に険峻な峡谷と平滑な高原状の起伏が見られるのは、前記のように、この山地が第二の輪廻に入った結果、川上川や城原川の下方侵食が復活して、各地に山紫水明の峡谷美を展開し、また豊かな電源を提供するとともに、地襞^{ちへき}から湧出する温泉は、古湯・熊川の温泉地を繁榮させている。

脊振山地の西部は牛津屋線の断層で画され、これ以西は新生代第三紀の頃沈降隆起を繰返して、海陸の変動を重ねた地域で、第三紀層に属する砂岩や頁岩^{けつがん}からなり、その後各地に安山岩や玄武岩、石英粗面岩などの火山岩が噴出して、第三紀層丘陵の山頂部を形成し、松浦杵島の低山地帯をなしている。

2 佐賀平野

中生代の末期、すなわち、白堊紀から新生代の第三紀にかけては、地殻の変動が激しかったが、第三紀末には、おおむね現在の地形が成立した。ところが第四紀洪積世に入ると地球は未曾有の冷湿な気候に見舞われ、高緯度地方や山岳地域に氷河が発達したので氷河時代とも言われる。とくに北米や欧州では、山地はもちろん平野でも氷河遺跡が認められ、わが国でも、中部山岳地域や北海道の日高山地などに氷河遺跡が見られる。しかし洪積世を通じて、始終寒冷な気候であったわけではなく、寒冷な氷期と温暖な間氷期が交互に訪れた。したがって、寒冷な氷期には陸水が凍結（氷河）したため、海水準が低下して海退現象^①が起り、温暖な間氷期には氷河が融解して海水準が上昇し海進現象を生じた。

地 質 時 代 表

地 質 時 代				紀 元 前	地 表 面 の 変 動	
新 生 代	第 四 紀	沖 積 期 (現世)		新期	4,000年 10,000年 15,000年 100万年	砂礫粘土層堆積・平野の生成
				旧期		
		洪 積 期 (更新世)		新期		
				旧期		
	第 三 紀	新第三紀	鮮 新 世		2,500万年	砂礫層堆積、玄武岩流出 多良岳火山生成
			中 新 世			
		古第三紀	漸 新 世			
			始 新 世			
			暁 新 世			
中 生 代	白 亜 紀		1億 4,000万年	東松浦地方の花崗岩おし上る (脊振・天山山塊)		
	ジュラ 紀		1億 7,500万年			
	三 疊 紀		2 億 年			
古 生 代	二 疊 紀		2億 4,000万年		結晶片岩類堆積 (脊振・天山山塊の三郡変成岩類)	
	石 炭 紀		3 億 年			
	デ ボ ン 紀		3億 5,000万年			
	ゴ ト ラ ン ド 紀		3億 8,000万年			
	オ ル ド ビ ス 紀		4億 5,000万年			
	カン プ リ ア 紀		5億 4,000万年			
原 生 代					14億 6,000万年	
始 生 代				18億 5,000万年 以上		

(『佐賀県史』上巻より)

洪積世はその名称のように、雨や洪水が多く、山地から侵食運搬された土砂が、山麓に堆積して台地や丘陵を形成した。これすなわち洪積層で、脊振山地南麓の神埼以東に発達し、三田川・鳥栖間では、国鉄長崎本線の南まで舌状に延びている。この洪積丘陵は先史時代には居住や墳墓の地となり、今日では開発されて畑地や果樹園、住居地にも利用されているが、一部はなお原野や雑木林の原始景観をとどめている。

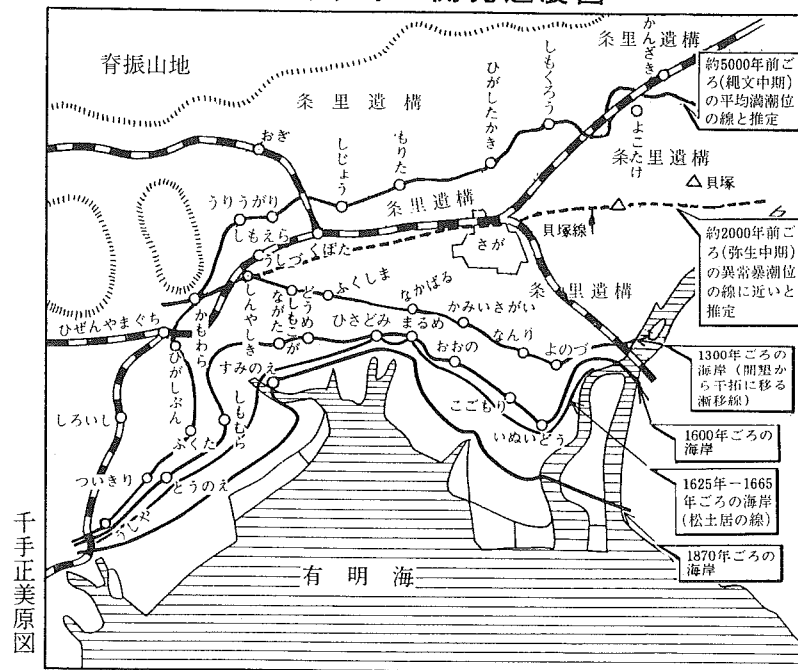
洪積世につぐ地質時代は現世の沖積世である。この時代はおよそ一万年前頃にはじまり、河川の運搬する土砂によって地層が形成され、河川の沿岸や海岸に低平な平野が展開した。これすなわち沖積平野である。沖積平野は洪水の被害もあるが、肥沃で交通も便利であるから農業をはじめ商工業が発達し、好適な人間活動の場となっている。

佐賀平野の大部分は筑後川や嘉瀬川などが山地を侵食して大量の土砂を運搬し、有明海の潮汐作用と相まって沿岸に堆積生成された沖積平野である。山麓地帯では礫を含む粗粒の土砂からなる扇状地が開け、その末端は海拔五メートル等高線付近に及んでいるが、おおむねこれを界として北部の古沖積層と南部の新沖積層に区分される。佐賀平野が先史時代の文化遺産に富み、歴史時代に入ってから後、文化の中心的位置を占めているのは、肥沃な沖積平野で、これを潤す河川と交通の便に負うところが大きい。

3 佐賀平野進展のあらまし

佐賀平野の生成上、最も関係の深い河川は九州第一の筑後川と嘉瀬川である。これらの河川の上流は最も雨量が多く、年平均二八〇〇ミリをこえ、大量の土砂を侵食して搬出する。しかも、南の有明海は潮汐干満

佐賀平野の開発進展図



主な参考文献

「佐賀県地理参考図集解説」

米倉二郎

(注) 1. 佐賀市街東南の条里は時代も降りなお検討の余地があるようである

2. 進展図については本文の二参照

3. 縄文、弥生文化時代の時期については本文17頁の注③④参照

の激しい点ではわが国第一で、湾奥部(住ノ江港)では大潮最大干満差は五・七〇メートル、異常気象時には六・〇メートルをこえることがある。したがって干潮時には、これらの河川の搬出する遊泥はるか沖合に及び、満潮は再びこれを逆搬して海岸に堆積する。このようにして有明海の沿岸には広大な干潟が成長し、河川の氾濫はさらに干潟と平野の成長を促進した。このような自然の営力を利用して、弥生文化時代の初め(約二千三百年前)から自然陸地の開墾が始められ、鎌倉時代の元寇以後は人工的干拓によってさらに平野の進展が促進された。とくに江戸時代以後は干拓事業の隆盛に伴

い、開発の進度はにわかにそのテンポを速めた。

元九州農業試験場干拓部の故村岡碩市技師の測定によれば、筑後川下流右岸の佐賀郡川副町前面の干潟の成長量(上昇量)は年平均七センチで最も大きく、同郡東与賀町地先干潟のそれは四・五センチ、白石平野地先干潟は一・五―二・〇センチと言われている。したがって水平距離的にも、佐賀平野進展図に示すように、約二千年前(弥生文化時代)の居住圏の南限(当時の異常暴潮位の線に近い)と推定される国道三四号及び二六四号線(弥生文化時代の貝塚線・おおむね海拔四メートル・後述)から筑後川右岸沿いに、川副町先端の平和堀(南川副干拓)まで、百年に一キロメートル、東与賀町のそれは〇・五キロメートル、久保田町では〇・三五キロメートルの割合に進出している。したがって縄文文化時代の中期、約五千年前(後述)の平均満潮位の線と推考される神埼町横武、佐賀市金立町下九郎・高木瀬町東高木・鍋島町森田、三日月町四条、牛津町生立ヶ里・下江良を結ぶ線(おおむね五メートル等高線)は北東から南西方向をとるのに対し、約二千年前、弥生文化時代の居住圏の南限と推定される前記の国道線はやや北東から南西方向に、約六九〇年前の鎌倉末期(元寇の頃)の海岸線はすでに南東から北西方向へと変わり、その後別図のように海岸線の偏向が増大して現在に至っている。

それではこの偏向の主因は何処にあるであろうか。これすなわち、九州第一の大河筑後川の搬出する遊泥量がきわめて膨大であり、かつ有明海の満潮流がその北岸に沿って西進するため、まず川副町地先に大量の遊泥が沈積し、西するに伴ってその量が漸減する結果で、潟土の粒子もしだいに微細化する。佐賀平野の開発はこのような自然の営力を利用して、われらの祖先が営々として自然陸地の開墾や干潟の干拓に努めた

結果にはかならない。

したがって佐賀平野の進展を検討するには、時間的空間的に、換言すれば歴史的地理的に線引きして解明する方が、理解しやすいと思われるので、佐賀平野を東西線で北から南へ線引きして、そのライン設定の理由及びその意義について述べることにする。

- ① 五メートル等高線の辺縁、おおむね神埼町横武、佐賀市金立町下九郎・高木瀬町東高木・鍋島町森田、三日月町四条、牛津町生立ヶ里・下江良の線（縄文文化時代の中期、約五千年前の平均満潮位の線）、古沖積層と新沖積層の漸移線、江湖堀（自然堀）の北限付近
- ② 海拔四メートル線の辺縁、おおむね牛津・佐賀を結ぶ国道三四号線、及び佐賀から千代田町詫田、三根町江見を経て久留米に至る国道二六四号線付近（約二千年前の弥生文化時代の居住圏の南限、当時の異常暴潮位に近い）、古代条里制の遺構の南限（但し問題点を含む、後述）
- ③ 開墾から干拓へ移行する漸移線（一三〇〇年頃）、おおむね海拔三メートル、大潮平均高潮位の線、川副町米納津・南里、佐賀市本庄町上飯盛・嘉瀬町中原、久保田町福島・上新ヶ江・芦刈町下古賀・浜中の線
- ④ 戦国時代末期（一六〇〇年頃）の海岸線（潮土居線）、海拔二・三メートル―二・五メートル、川副町犬井道・小々森・広江、東与賀町住吉・大野、佐賀市西与賀町丸目・嘉瀬新町、久保田町久富、芦刈町新村・道免・永田・戸崎の線
- ⑤ 松土居の線、概略海拔二メートル、平均満潮位の線、江戸時代初期（一六二五―一六六五年頃）の海岸線（但し地区により相異がある。詳細後記）

- ⑥ 幕末明治初頭の線（一八五〇―一八七〇年頃）、おおむね海拔一・三メートル、小潮平均高潮位の線、無税地堀（川副町）、大堀（東与賀町）、再興堀（佐賀市、最初の干拓は文政年間、高潮のため「破れ堀」となったものを幕末明治初頭再興）、新地籠（佐賀市嘉瀬町と鹿島市の干拓地は最近のものを除きほとんど籠名）、旦那様堀（久保田町、一名江戸堀）社堀（芦刈町）に至る線
- ⑦ 現在の潮受堤防（通称潮土居）線、海拔〇・三メートル―〇・七メートル、最前線干拓地名省略

（備考） 最前線干拓地前面の干潟は新干拓地築造後逐年成長（上昇）し、佐賀市域及びその近隣は地盤沈下のため、前記の数値と異なる所が多い。

○主な参考文献

『佐賀県史』上巻

注

- ① 地域的に地盤の隆起や沈降に因っても海退海進現象を生ずる。
- ② 潮位に関する数値は元九州農業試験場干拓部の故村岡碩市技師の測定（住ノ江）による。以下同じ。
- ③ 弥生文化時代は今から約二三〇〇年前から一七〇〇年前ごろまでの間
- ④ 縄文文化時代は今から約九〇〇〇年前から二四〇〇年前ごろまでの間で、その後一〇〇〇年間は弥生文化時代に移る過渡期と考えられている。

(二) 有明海面の変動と平野の進展

1 五メートル等高線の意義

前に述べたように、第四紀洪積世は冷湿な地質時代で、氷期と間氷期が訪れ、それに伴って海退海進の現象を生じた。したがって地史学上洪積世最後のウルム氷期にマイナス一三〇メートルほど海退した有明海の水位は沖積世の初頭にはマイナス四〇メートルに、約八千年前の縄文文化時代の早期にはマイナス五メートル以内に上昇し、約五千年前の縄文中期には逆にプラス四メートル近くまで海進したと考えられている。したがって当時の有明海の平均海面は、おおむね牛津、佐賀、詫田、江見、久留米を結ぶ国道三四号線及び二六四号線の海拔四メートル線近くに及んだのではないかと推察される。もともと前記の線は嘉瀬川などの乱流により、大小のデルタが散在したため、当時は極めて複雑な海岸線を形成していたものと考えねばならない。

したがって縄文中期頃の有明海は今日に比して極めて広大であり、大潮時の最高潮は前記の横武―下九郎―東高木―森田―四条―生立ヶ里―下江良を結ぶおおむね海拔五メートル等高線を越えて尼寺東西の線近くまで達したものと考えられ、おそらく前記の集落の線はおおむね当時の平均満潮位の線であると推考される。

この海拔五メートル等高線はその下底に牡蛎殻層を含む溝渠（堀）の北限として、また古沖積層と新沖積層の、水田と畑作（比率上）の漸移線としての意義をもっている。今日佐賀市の都市計画において、市街化区域が北方に延伸しているのは、古沖積層からなる北部の地盤が高燥強硬であるのに反して、新沖積層からなる南部は米の単位収量が高く、また地盤は低湿軟弱であると言う自然的条件もその一因である。

その後再び海退現象が続いて、縄文文化時代の晩期から弥生文化時代への過渡期すなわち二千四百年乃至二千三百年前には、マイナス二・三メートルに低下したが、その後再び漸次海進して古墳時代の後期（六〇〇年頃）には現在の水位に復して今日に至っていると考えられている。

以上洪積世の末期から古墳時代の後期に至る有明海面の変動を略述したが、海退期には広大な干潟荒野（芦原）が展開して、野獣や渡鳥などの楽園と化したことが想像される。

縄文文化時代は人口も少なく、自然の動植物に依存した採集経済時代であるから、一定の場所に定住生活を営まなかったようであるが、その居住圏が良質の水と各種の食糧に恵まれた脊振山地の山間山麓であったことは今日当時の遺跡や遺物の分布がこれを物語り、とくに脊振山地の南麓は前記の生活資源だけでなく、塩や魚介類の獲得も容易で、その上日照にも恵まれ、好適な居住地域であったと考えられる。もともと彼等の行動圏が、有明海の海進海退に対応して、ある程度縮小拡大したことは想察されるが、その主な領域は山間山麓地帯であったと考えられる。今日当時の遺跡としての貝塚は発見されていないが、それは一定の場所に長く定住生活を営まず、また貝塚を設けたにしても、その後の海進と頻発する洪水のために、地中に埋没または散逸したであろう。

2 海拔四メートル線の意義

今から約二千三百余年前から弥生文化時代（紀元前三〇〇—三〇〇年）になると、金属器の使用がしだいに普及し、石器とともに併用したので金石併用期とも呼んでいる。しかしこの時代は金属器の使用だけではなく、一定の住地に定着して水稻栽培をはじめたので、縄文文化時代に比して一段と生活文化の躍進した時代である。

したがって、われらの祖先の居住圏は弥生時代の海退に伴い拡大した平野面に展開し、灌漑・排水・防災（洪水・干害）対策上、共同作業に有利な集村が発生した。今日アジアの水稻地帯に、集村形態が多く見られるのは、このような条件が主な理由の一つである。弥生文化時代における集村の発生発達は、やがて有力な首長に統合されて生じた部落国家成立の基盤としての意義も深い。

ところで当時の居住圏の南限は、既に述べたところの牛津—佐賀—詫田—江見—久留米を結ぶ国道三四号線と二六四号線（概略海拔四メートルの線）付近と推考される。その根拠は故松尾楨作によれば、前記の海拔四メートル線付近に位置する石井・持丸その他の貝塚から、弥生文化時代に属する土器類の出土に因るものである。しかし当時の海岸線が前記の国道線のように単調なものではなく、嘉瀬川その他の乱流により、大小多数のデルタが錯雑して、複雑な海岸線を形成していたことは注意を要する。

この石井・持丸の貝塚を基準として、現在に至る佐賀平野の進展は、筑後川下流右岸において百年に一キロメートルの割合となる。この概算の根拠は前記石井・持丸の貝塚から川副町南端の平和堀に至る直線距離

二〇キロ（余）を二千（余）年で除した結果である。但しこの数値は、自然陸化地域の開墾に、鎌倉末期以来実施された人工的干拓の成果をも含めて計算した数値で、後に述べるように、干潟成長の最も旺盛な筑後川下流右岸においてのみ適用される計算であり、干潟成長量の漸減する東与賀町大塚堀以西地域ではこの計算法を適用することはできない。なお既述のように、縄文文化時代の中期、プラス四メートル近くまで海進した有明海の水位は、その後海退を続け、弥生文化時代の初頭頃はマイナス二・三メートルの水位に海退した関係上、おおむね海拔四メートル線付近、すなわち当時の居住圏の南限は、異常暴潮（潮位四メートル）に際しても防潮堤防の必要はなく、その後漸次海進して、古墳時代の後期（六〇〇年頃）には現水準に復したので、台風時の異常暴潮に備え、低い土堤を設けて既成の居住圏を防護したものと観察される。しかし後述するような観点から、これをもって直ちに干拓の初現と考えることはできない。また、前記の国道線は大化改新後施行された律令制度に基づく条里制の南限付近で、この線以北の平野地域に条・里・坪などの地名とその遺構が認められる。したがって前記のように、古墳時代の後期には、有明海の潮位は漸く今日の常態に復したので、条里の南限が有明海の大潮最高潮位三・五メートル、異常暴潮位四・〇メートルとの関係が深いことも理解されるであろう。それ故、異常暴潮とくに台風時の高潮に備えて、簡単な土堤を設けたことも観察される。

なお、今日の佐賀江左岸及び右岸の北川副町・諸富町一帯にも、条里制の施行を示唆する坪名や遺構が認められるが、当該地域の地盤高と潮位の上から問題があり、今後の研究が期待される。もっとも左右両岸を比較した場合は、右岸の方が律令時代の遺構としての可能性が強いようである。その理由は現在の佐賀江の

分流新川と筑後川間は、地盤も高く、地形的に当時筑後川の自然堤防を主軸とする大きなデルタを形成していたものと考えられるからである。この新川は後に述べるように、江戸時代の初頭、成富兵庫が新規に開削したのではなく、諸富町の野町以北に江湖名が遺存するところから、彼の開削事業は野町東南の一部の堀筋で、他は改修を加えたものと判断される。

以上述べたところの条里地域の前面には牟田（湿地）荒野（芦原）が散在し、異常暴潮（高潮）に備えた低い土堤を隔てて、さらに荒野・干潟の景観が観察されるが、これらの牟田・荒野は平安初期以来、律令制度の弛廢に伴い、権門勢家によって開発され、後述するように元寇以後はさらに前面の干潟荒野が干拓の対象となるのである。

○主な参考文献

有明・不知火海の第四系（『地学団体研究会専報』第十一号）

注

① 有明・不知火海の第四系（『地学団体研究会専報』第十一号）

（三）干拓平野の展開

1 開墾と干拓

前に佐賀平野について述べたとおり、有明海沿岸の自然条件を利用して、とくに江戸時代以来盛んに干拓事業が推進されて現在に至っているが、それでは干潟の干拓は果していつ頃から開始されたであろうか。しかしこの問題を検討する前に、土地開発を自然陸化地の「開墾」と、堤防を築き水の侵入を阻止して内域の開発を計る「干拓」に区別して考える必要がある。しかしこの意味において考察する場合、開墾と干拓の厳密な空間的・時間的限界を要求することは無理である。まして潮汐干満の差の大きい点では日本一と言われる有明海沿岸では、潮位上の基準を何メートルにおくかによって、開墾と干拓の相異を生ずる。すなわち明らかに堤防築造の有無をもって開墾、干拓の限界を決定するならば、約千四百年前の古墳時代の後期、既に述べた国道三四号線と二六四号線の内域は干拓地域と言わざるをえない。なぜならばこのルートはおおむね海拔四メートルで、それまで海退していた有明海の水位は現状に復し、その異常暴潮の潮位は四メートルであるから、低い土堤を設けたことが観察されるからである。したがって堤防構築の初現をもって開墾、干拓の限界を決定するならば、地域的には前記の国道線の辺縁内域、時代的には古墳時代の末期とすることにな

る。しかし台風その他による異常暴潮は数年、または十数年に数時間の問題で、他は前記の地域(干潟荒野)は完全に露出の状態にあるから、この地域、この時代をもって開墾・干拓の限界、換言するならば干拓初現の地域または時代とすることは妥当性を欠くことになる。

したがって開墾、干拓の空間的・時間的限界は、防潮堤防の初現、異常暴潮位、大潮最高潮位、大潮平均高潮位その他の潮位基準によって一定しないこととなる。この場合、防潮堤防の初現と異常暴潮位の問題は既述の通りであるが、その限界を大潮最高潮位とする場合も、一か月の中、ほとんど海面上に露出する地域を干拓地域とすることは、やはり妥当性を欠くため、当該地域の地盤高と大潮平均高潮位との関係、古資料及び当時の社会的条件などを勘案して、開墾と干拓の概定限界とすることにした。

2 開墾と干拓の漸移線

干拓に関する古文書 前に開墾と干拓の潮位上の限界を大潮平均高潮位に基準をおくことを述べた。しかし潮位は湾奥部が最も高く、湾口部に近づくにつれて漸減するが、佐賀平野地先は二応大潮平均高潮位三メートルとして検討する。この場合おおむね海拔三メートルの地帯に立地する集落として、既に記した米納津・南里(以上川副町)、上飯盛・中原(以上佐賀市)、福島・上新ヶ江(久保田町)、下古賀・浜中(以上唐刈町)の一連の集落があるが、この中米納津・南里については、大和町の高城寺に米納津(旧米津)、南里前面の干潟荒野の開墾(正応元年一二八八)に関する古文書がある。ところで「荒野」とは一口に言えば有明海沿岸では芦原(よしはら)のことであるが、若干解説を加える。すなわち干潟が成長して小潮平均高潮位一・

三メートルを越えると、干潟は小潮の満潮時でも露出するので、干潟はしだいに硬化して浜菜が生え、さらに成長が進むと芦が繁茂して渡り鳥の好適な棲家となった。古文獻や古老の伝承によれば、明治初期までは有明海沿岸には広大な芦原が展開して、鶴の渡来を伝えている。しかしその後干拓事業が益々盛んとなり、その規模が拡大するにつれて、このような自然景観はしだいに姿を消したのである。したがって鎌倉末期頃は、成長した広大な干潟に、一面の芦原が展開していたことは容易に想像できるであろう。

古文書の記事により、川副町米納津・南里一帯の自然景観は前記の通りであるが、当該地域の標高は二・六メートル乃至三・三メートルで、地先の大潮平均高潮位は三・〇メートルである。したがって大潮平均高潮位の際は、当時海面上に露出する所と、水没する所があって、自然陸化地の開墾から干拓へ移行する漸移地帯と考えられる。

古文書の内容は肥前国守護北条時定が、元寇後三十四才の若さで没した執権北条時宗の冥福祈念と僧侶の食糧に充当するために、新田開墾の対象として寄進したもので、干拓の範囲を明記した四至が記載してある。(四一〇〜四一三ページ参照)

その他の古文書 『高城寺文書』とわずかに前後して、熊本平野においては飽託郡天明村上内田の牟田荒野の開墾(『大慈寺文書』、弘安七年一二八四)と柳川平野の沖端川沿岸の荒野の開墾(『浄土寺文書』、乾元三年一二三〇三)があるが内容は省略する。

3 元寇と干拓

前記の地区は古文書の内容、地盤高、潮位、並びに自然景観の上から、自然陸化地の開墾から干拓に遷移する漸移地帯と考えられるが、何故にほぼ時を同じくして有明海沿岸の新田開発が計画されたであろうか。我等はこれらの古文書がいずれも元寇直後のものであることに注目しなければならない。

思うに元寇は日本歴史上最大の国難であり、西国武士をはじめ農民の動員^{ふそき}賦役も激化したことは言うまでもあるまい。したがって、戦時食糧の需要が急増したのに反して、その生産量は戦乱と労力不足のため激減し、なおまた、後日元の来襲に備えて、食糧備蓄の必要があったことは想像するに難くない。このような食糧事情は元寇後の初期の倭寇が朝鮮沿岸を掠略するに際して、主として当地の食糧を略奪したことによって裏付けすることができるであろう。しかも、食糧生産の基盤は言うまでもなく土地であり、また、元寇後の論功行賞に当り、土地不足を生じたことは、武力薄弱な社寺や公卿の莊園に対する有力武士の侵略が頻発した史実がこれを物語っている。

要するに元寇以後、前記のような社会的情勢により、西国における食糧難と土地不足は激化し、寸土といえどもその経済的価値を高めて開発の対象となったことは容易に^{うなず}諾けるであろう。ところが有明海の沿岸を見渡せば、成長した干潟荒野が広々と連なっており、低い土堤を築けば比較的容易に耕地化できる状態にあったことが推測される。したがって前記の如き社会的条件から、有明海沿岸の干潟荒野が開発の対象として着目され、元寇以後ついに大潮平均高潮位の線を突破するに至ったものと考えられる。

前記川副町の米納津・南里の線、すなわち開墾から干拓へ移行する漸移線は、おおむねこれと地盤高、潮位を同じくし、なお堤塘の痕跡としての道路などの点から、既述のようにその西部延長は上飯盛―中原―福島―上新ヶ江―下古賀―浜中の線と推定される。

元寇の直後正応元年（一二八八）『高城寺文書』に米納津、南里前面の干潟荒野が、開発を目的とする寄進物件として出現して以来約三百年間に、干拓地の進展は直線距離で、約二乃至四キロメートル南方の戦国末期の潮土居線すなわち和崎・犬井道・小々森・広江（以上川副町）^{ついで}作土井・住吉・大野（以上東与賀町）丸目・嘉瀬新町（以上佐賀市）久富（久保田町）・新村・道免・永田・戸崎（以上芦刈町）の線に進出した。このうち、犬井道―小々森―広江間では、特殊景観的な遺構をとどめ、俗に「中島」と呼んでいる。

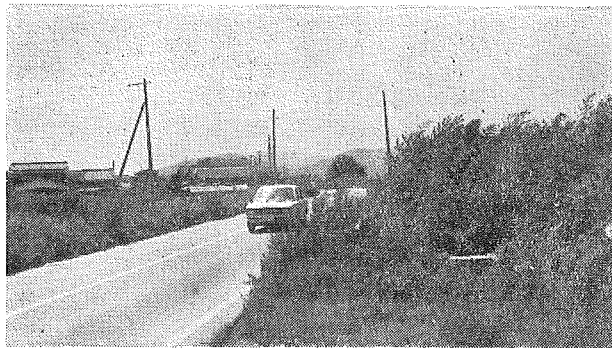
この戦国末期（一六〇〇年頃）の潮土居線から干潟成長の旺盛な東部では、寛永の初頭には約一キロメートル南方の松土居の線（海拔二メートル）に進出し、幕末明治初頭の頃にはさらに二キロメートル進展して小潮平均高潮位の線（一・三メートル）に達し、昭和初期には約一・三キロメートル進出して干拓地の先端は海拔一メートルを割り、現在さらに一キロメートル進出して川副町の平和瀬や国造瀬の先端は〇・三メートルに低下しているが、杵島郡の有明干拓有明工区の先端の一部はマイナスメートルに及んでいることを付記する。



『元禄十四年肥前国絵図』の一部（1701・約280年前）
干潮時の絵図で広大な干潟の発達が見られる。筑後川口には長大な三角州が現われ、大多久間村長二十八丁横十三丁の記載があり、牛津川と六角川はしだいに同一河口の河川になりつつある。



『慶長年中肥前国絵図』の一部（慶長末期・約360年前）
満潮時の絵図で、牛津川は六角川の支流ではなく、まだ独立河川の形態である。福富町の西部に「干出」の記載があり、筑後川口の大三角州（川副町の大詫間と大川市大野島）は現われていない。



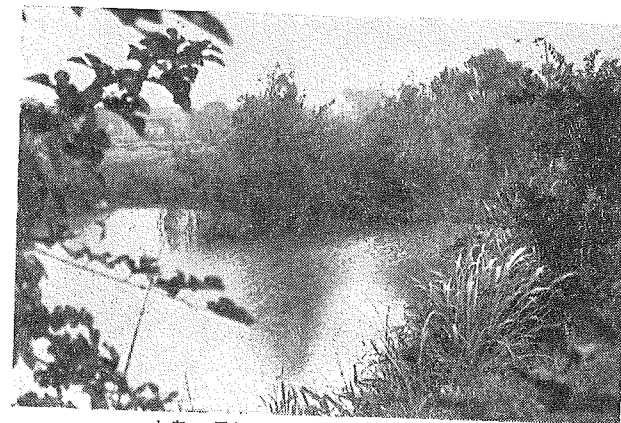
かや
葺土居の現在（佐賀郡久保田町、大川―鹿島線）

佐賀市街から南方約六キロメートル、広々とした佐賀平野の彼方に蜿蜒長蛇のように連なる大堤防がある。この線はおよそ海拔二メートルで平均満潮位と一致する。戦前までは松の巨木が散立して、吹く潮風に天然の音楽を奏していたので「松土居」または「本土居」とも呼んでいた。本土居の名称は、この堤防が築造後前線干拓地の進展にもかかわらず、長期にわたり穀倉佐賀平野を守る主陣地的防塁としての役割を果たしていたことを物語るものである。しかしこの松土居は構築の当初から、今日のように雄大なものであったと考えすることはできない。後の「気候と災害」で述べるように、頻発する

5 松土居の線

目・嘉瀬新町・久富・新村・道免・永田・戸崎などの路村が発達している。これらの集落は元来堤塘集落として発生したものであるが、その後、地先干拓地の進展と人口の増加に伴い、格子状路村を形成しているものもあり、東部の犬井道や西部の永田（芦刈町）などはその主なものである。犬井道は戦国の雄龍造寺隆信^{ゆかり}の地で、龍神を祭る海童神社があり、珍しい民家建築として「漏斗谷^{じょうたに}」の家が見られるが、詳細は後記の「気候と災害」にゆずる。

4 戦国末期の線

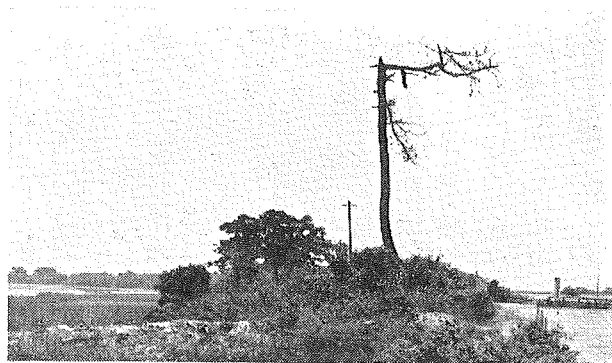


中島の景観（佐賀郡川副町小々森付近）

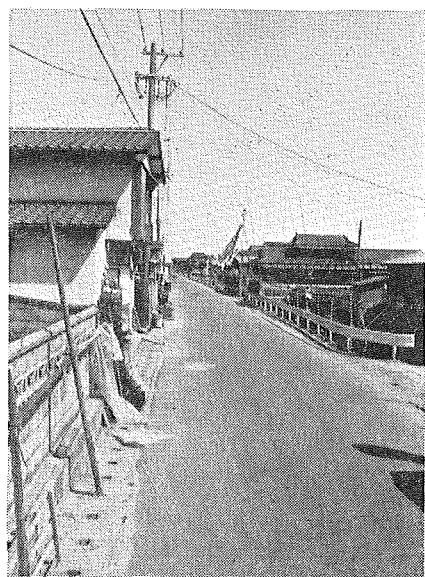
米納津・南里の線から約四キロメートル南に進むと、川副町の中心集落犬井道に着く。その入口で不整型の溝渠（堀）が西方に連なり、その中央に柳や竹や芦のおい茂った細長い島が、西進するにつれて点在している。これは俗に「中島」と呼び、戦国末期の旧潮土居を解崩して、第一線堤防の土材料に利用した旧堤防の痕跡である。

この中島一帯には、今を去る約四百年前、佐賀の豪族龍造寺隆信が、武運長久、五穀豊饒を祈念して、太宰府天満宮を勧請し、七天神を祀ったと伝えられ、今でも天神の社祠が多い。この土居跡は西方は道路として蜿蜒と連なり、芦刈町の牛津川畔に達している。久保田町ではかつて葺土居と呼ばれ、戦後も葺の茂った高道が残存して、いくらか往時の面影をとどめていたが、今日では県道大川―鹿島線の道路開通のため、昔の面影はほとんど消えてしまった。

この戦国末期の線はおよそ海拔二・三乃至二・五メートルで、既に述べたように、小々森・広江・作土井・住吉・大野・丸



松土居の名残り（西与賀町）



松土居の跡（佐賀郡川副町犬井道）

ほとんど搦名で各々その景観を異にする。したがって、簗名の干拓地の築造は搦名のそれに比べて時間的に遡ることとなる。しかし佐賀市嘉瀬町や鹿島市では、明治以後の干拓地も簗名で、その他若干の例外がある。

大部分は解崩されて田畑と化し、この間は六千間土居と合一して白石平野東部の主要道路となっているが、一般にはこれを全体的に五千間土居と誤称している。

この松土居を界として、土居内を一般に「揚」または「揚地」と呼んで簗名の干拓地が多く、土居外はほとん



松土居の景観（昭和30年頃・嘉瀬町）

高潮のために度々大決潰したが、とくに正徳、文政年間の高潮のため、各地で櫛の歯のように決潰し、その都度補強されて、今日の雄姿をとどめているのである。

この松土居の最初の構築年代については、後述するようにその前身としての「潟土居」の問題があり、本格的な潮土居を基準としても地区によって相異があるが、おおむね三五〇—三二〇年前の寛永、寛文の間と推考される。松土居はその後数線に渉る干拓地の前進と第一線堤防の近代化に伴い、高潮防塞上の主陣地的意義を失ったため、第一線潮土居築造用の土取場として解崩され、所によつては高道や平道（犬井道）と化した所もあるが、東は早津江川畔から西は六角川畔に達し、さらに対岸の福富町住ノ江から五千間土居（松土居・本土居）と呼んで、白石平野を南西に延びて有明町戸ヶ里に達していた。しかし、現在では途中

松土居の外側には、地区によっては三線乃至五線にわたって堤防（またはその痕跡としての道路）が張り廻わされ、その最前線の堤防を俗に「潮土居」と呼んでいる。潮土居はすなわち第一線の「潮受堤防」で、その前面には満潮時には淡く濁った有明海の波が悠々とうねり、干潮時には暗黒色の干潟が広々と展開して大小の溝筋が天然の縞模様を描き、ムツゴロウをはじめ珍奇な海棲動物が跳梁している。この数条の堤防（または道路）間には、おおむね長方形の棚が抱かれ、内側から外側に進むにつれて、新田開発の年代順を推察することができる。

6 潟土居と干拓堤防

『佐賀県干拓史』（第一篇九一〇頁）によれば、天文二十二年（一五五三）七月二十五日龍造寺隆信が筑後の一木から佐賀の城への帰途（時間的に干潮時と推定）、同地の漁夫園田次郎兵衛等の押桶に乗って三百間堀（当時江湖）から上陸したと伝えられると記されているが、『慶長年中肥前国絵図』には犬井道の記載はない。しかし犬井道は藩境の要地であり、鹿ノ江に属する集落の萌芽が存在したことが想察される。三百間堀は今日松土居外堤東端の外側に遺存しているが、その当時は干潟の溝筋で、干潟は現在広大な美田と化している。

ところで川副町においては、戦国末期の天文の頃、既に松土居とその外堤が潟土居として存在したことが推察される。しかも前述の記事は、川副博によれば史実として信憑性が高く、また次郎兵衛の功により、その子孫は堅網漁業の特権を許され、その判物板札が犬井道の園田家に遺っている。伝承によれば隆信は今

日の松土居外堤の東端付近に上陸したわけで、現在三百間堀の北端、松土居外堤上に隆信上陸地としての記念碑が立てられている。

今日でも第一線の潮受堤防を俗に潮土居（しおでー）と言い、潟土居と呼ぶ施設はない。堅固な近代的潮受堤防に防護された最近の干拓地では、明治以前のように潟土居の施設も、堤塘に集落を営む必要もなく、営農と社会生活の便宜上、平地に路村が立地していることは周知の通りである。しかし築堤技術の未熟な当時においては潮汐干満が激しく、また高潮災害の頻発する有明海沿岸では、内陸部の堤塘集落は、第一に高潮災害に対する安全性が高く、堤塘両側の溝渠は日用水源となり、土地は高燥で衛生に適し、堤塘上は道路として交通にも便利であったからである。

それでは潟土居はどのような施設であり、またどのような機能を果たしたものであろうか、大正の初め、さらに終戦直後自ら実見した干拓地に遺存する潟土居と、それに関する古老の説明を参酌すれば次の通りである。

往時の潟土居は一・五メートル程度の低い土堤が一般的で、域内には溝筋が通って海水が出入する。したがって小潮時

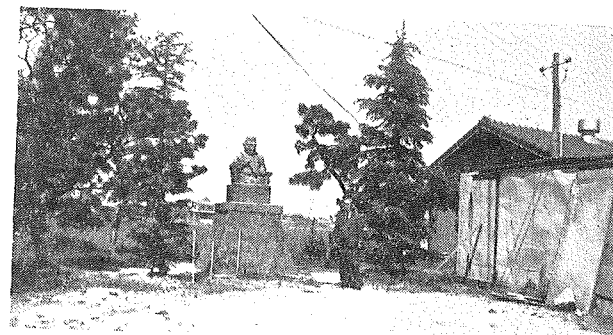


三百間堀（佐賀郡川副町犬井道）

間は数条の潟道で連絡されていた。この潟道も潟土居と同じく、大潮の満潮時には水没するわけである。かつて久保田干拓の干潟時代には、その当時の潮土居を潟土居と呼んでいたが、これは往時の潟土居が嵩上げ補強されて、機能的には潮土居に昇格した後も、慣習的に旧称で呼んでいたものと思われる。

なおここに念のため付言しておきたいことがある。現在の佐賀平野南部の干拓地域は、明治以後の耕地整理を主とし、さらに今日推進中の圃場整備事業により、往時の面影はほとんど消失しているが、既述の戦国末期の堤塘線と松土居間及び松土居と後述する幕末明治初頭の潮土居間には、魚鱗のように数多の干拓地、換言すれば数多の堤防が存在したことである。これらの小堀は農民の共同築立に成るもので、今なお遺存する数多の地名がこれを物語っている。堤防の多くは明治以後新干拓地の前進に伴って解崩整理され、あるいは農道（旧称馬道）として残存していたが、中でも局部的に堤塘の姿を長く留めているものは、旧堤塘の一部を利用した墓地である。これを俗に「野墓」または「びゅう」とも呼ぶが、「廟」の転訛であろうか。この野墓はあたかも平野の中の小島のように点在して、往時の干拓堤防の残影として、そのルーツを知る上に一つの根拠となるだけでなく、古い墓碑銘（俗名と死亡年月日）は前面干拓地の築立年代や築造の主体者（妨頭）並びに地縁血縁上の親村子村の關係などを調査研究する上に貴重な資料を提供していた。しかし戦後はほとんど解崩されて、本寺や納骨堂に転祀されたため、干拓の歴史地理学的研究上大きな支障を来す結果となった。

以上築堤技術の未熟な明治以前の干拓堤防について略述したが、これを仮りに軍用語で表現するならば、潟土居は前哨線で、潮土居は第一線陣地、本土居は主陣地で、しかもその間に数線にわたる防禦線（通称中



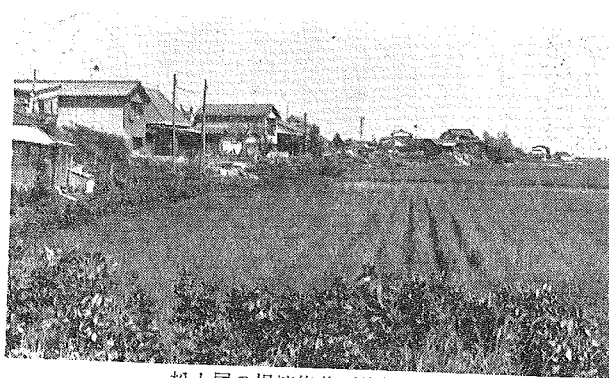
松土居外堤にある龍造寺隆信の像（佐賀郡川副町犬井道）

には満潮時（小潮平均高潮位一・三メートル）でも潟土居は露出するが、大潮時には海水はまず藩筋を遡流し、潮位が潟土居を凌駕すると、潟土居を越えて域内に流入して潟土居は水没するわけである。このようにして潟土居内に遊泥の沈積を助長し、干潟荒野の成長と潟土の硬化を計り、次期干拓の便に備え、また波圧の減殺を計った。

干潟が成長硬化するとまず浜菜が生え、さらに芦（よし）が繁茂して遊泥の沈積を一層促進するとともに第一線の潮土居に対する高潮風波の圧力を削減する効果がある。しかし潟土居の

機能はそれだけではなく、小潮時には漁船の繋留地となり、干潮時には潟漁（がたりよう）の拠点として利用された。

この潟土居は地区によっては新旧数線にわたり、第一線潮土居との



松土居の堤塘集落（佐賀郡東与賀町）

土居)があつて、まさに複廓陣地の形態を備えていた。このような防潮態勢にもかかわらず、「気候と災害」に述べるように、江戸時代の正徳、文政の嵐には、松土居は各地で大決潰を起し、濁流が佐賀大学付近にまで及んだ記事(『疏導要書』)がある。しかも築堤技術の進歩した大正年間さえ、同三年(一九一四)八月の高潮においては松土居(本土居)が各地で決潰して、土居内側の揚地(あづち)の一部が泥海と化した現場を自ら実見している。

7 松土居の築造年代

松土居の概要については既に述べた通りであるが、それではこの松土居は果して何時頃築立てられたであろうか。このことは換言すれば、佐賀平野が何時頃この練まで進展したかと言う問題と一致する。しかしこの事実を明確に立証する古文獻はない。したがって次のような間接的資料によって、およその築造年代を考証するとともに、読者の理解に資する意味で前に「潟土居」に関することを付言した。したがってここに述べる松土居の築立年代は、松土居の前身としての潟土居のそれではなく、松土居が潟土居の段階から大きく補強されて、潮土居すなわち有明海の風波に対して、第一線の潮受堤防の役割を果たすに至った年代を指すものである。

① 約三六〇年前の『慶長年中肥前国絵図』(慶長末期、略称『慶長絵図』)によれば、佐賀平野の南限鄉村として、早津江・鰯江(以上川副町)・鹿子・飯盛(上飯盛、以上佐賀市)・加世(嘉瀬町、佐賀市)・大俣(久保田町)・平吉(芦刈町)などが記載されている。

② 『慶長絵図』から約三〇余年後の『正保四年肥前国絵図』(一六四七、略称『正保絵図』)には、佐賀平野に多くの集落が現われて石高の記載があり、その南限集落として、東から犬井堂村(八一〇石余、現在犬井道)小籠村(八六七石余、現在小々森、以上川副町)下古賀村(一二七九石余)田中村(八三五石余)下飯盛村(一八九二石余、以上東与賀町)高太郎村(九四八石余)有重村(六八七石余)中原村(一二二三石余、以上佐賀市)横江村(一一一石余、久保田町)牛王村(四九八石余、芦刈町)がある。このほか南限集落として二、三の記載があるが、『正保絵図』は次の『元禄十四年肥前国絵図』に比して、集落の位置や地名の上に疑点が多く、検討の紙幅もないので、これらの集落は省略することにした。もっとも芦刈町の永田ケ里村(六〇九石余)は明らかに記載位置の誤りであり、他に混同する集落もないので、これは検討の対象としてとりあげることにした。なお前記の集落の中、犬井堂村・小籠村と芦刈町の永田ケ里村はおおむね戦国末期の潮土居線に立地するものである。

③ ところが『正保絵図』より降ること五五年、『元禄十四年肥前国絵図』(一七〇一、略称『元禄絵図』)を見ると、戦国末期の潮土居線に、前記の集落のほか、さらに和崎(川副町)住吉・大野(以上東与賀町)丸目(佐賀市)久富(久保田町)永田ケ里(六〇九石余、芦刈町)が記載され、なおその前面に新集落福満(石高記載なし、現在の弁財と推定)が出現している。したがって『正保絵図』所載の永田ケ里村の位置が誤りであることがわかる。

以上の資料によって、慶長末期から元禄年間に至る約九〇年間の集落の発生発達とその南進が明らかであるが、これは藩当局の重農政策と人口増加の圧力が相まって、自然の営力を利用した干拓新田の進展と居住地

域(エクメネー)の拡大を促進したものである。しかも前記の南限集落の中には石高の記載あるものが多いところから、同地区が既に熟田化して貢租の対象となっていたことを物語っている。しかし正保、元禄両絵図に現われる戦国末期の潮土居線に立地する集落の中、小籠こまごを除く全集落の石高が同一であるのはまことに疑問とするところで、正保から元禄に至る約五〇余年、この間の耕地の拡大と熟田の増加が推察されるにもかかわらず、南限集落の石高にほとんど変化が見られないのは、おそらく総石高に符合するよう適当に勘案して幕府に報告したものと考えざるをえない。

それにしても正保・元禄両絵図に現われる集落の中、戦国末期の潮土居線に立地する集落が、多くは石高の記載があり、また『元禄絵図』に石高の記載を欠くにしても各地に新集落の発生が認められる以上、これらの集落の背後耕地が熟田化し、さらに既述のとおり、その前面には数線にわたる新干拓地(堤防)が既に存在したはずである。このことは最近の科学の粋をこらした近代的大堤塘と異なり、築堤技術の未熟な当時においては、「潟土居」で述べたとおり、干拓集落の発生と立地上極めて重要な必要条件であるからである。

④ 芦刈町の松土居外側にある大黒棚、さらにその外側にある宝永棚が宝永年間(一七〇四—一七一〇)の築立であることは古来の伝承と符合し、したがって前記二つの棚の位置の上から、松土居の築立は宝永年間よりも数十年さかのぼ遡るものと推考される。

⑤ 久保田町において、松土居登り口の八幡社の石庫はとくらに寛文五年(一六六五)の銘記があったから、同年またはそれ以前に松土居の構築が完成したと考えられる(『佐賀県干拓史』—現在同地にはない—筆者) 現在右八幡社の石庫はとくらに元文五年(一七四〇)の刻銘があるのは、松土居築造後、正徳の嵐(同五年—一七

一五)に大決潰を起したが、三〇年後の元文五年に再構築が完成したものと考えられる。なお松土居内側に「棚」名の集落があるが、これは元文五年以後の発生で、前記正徳の嵐による松土居の大決潰から、元文五年に再構築される間の約三〇年間は、背後の戦国末期の旧潮土居が防潮の役目を果たしていた。この土居はかつてはなま土居と呼ぶ高道であったが、最近では大川市と鹿島市を結ぶ平野南部の重要な道路(県道)となっている。

⑥ 佐賀平野地先は風波の当りが強いにもかかわらず、既に述べたように筑後川の搬出する大量の遊泥と、有明海の北岸を西流する満潮の営力により、犬井道地先干潟の成長が最も顕著であり、西部の芦刈町西南地区は、六角川の営力と福富潟の成長が風波の当りを減殺するため、いくらか干潟の成長が速やかであるのに対し、久保田、嘉瀬地区は筑後川の営力の効果が少ない上に風波の当りが強く、干潟の成長がおくれている。このような自然条件の相異は、江戸時代における佐賀平野東西両端の犬井道及び永田のような大集落の発達並びに新集落の発生と密接な関係がある。

⑦ 「潟土居」で述べたように、天文年間末、犬井道地先では松土居の前身が潟土居として存在したことが推察されること。

⑧ 『疏導要書』に白石平野の旧称松土居(五千間土居)が寛永年間に成富兵庫の指導によって構築されたような記事があり、また芦刈地区の干拓にも関係あることを示唆していること。もしこの事業が事実とすれば、成富兵庫は寛永十一年(一六三四)七十五才で没しているから、寛永初頭の築造と考えられる。

以上(①—⑧)の間接的資料及び当時の干拓規模や工事過程、干潟景観並びに社会的環境などを勘案して

松土居の築造年代、換言すれば潟土居から潮土居への松土居の昇格年代はおよそ次の通りである。

既に述べたように、現在の犬井道—小々森—広江—大野—丸目—嘉瀬新町—久富—道免—永田—戸崎の線は、戦国末期の潮土居線で、海拔二・三乃至二・五メートル、小潮時には満潮に際しても露出する地域である。(小潮平均満潮位一・三メートル)しかし大潮最高潮位三・五メートル、異常暴潮位は四メートルであるから当然水没する。ところで戦国末期の潮土居は、永年にわたる戦国乱世のため、長期の間佐賀平野を守る第一線堤防としての役割を負担したのである。したがってその外縁地帯は自然のままに放置された結果、広大な干潟荒野と数線に及ぶ潟土居と潟道の景観が推察される。荒野は芦野(よしの)であり、潟土居や潟道は大潮時に水没することは既述の通りである。しかし江戸時代になって、徳川政権の下に社会が安定すると、これらの潟土居は順次に嵩上げ補強されて潮土居となり、急速に小堀の進展を促進したが、同時に干拓地の先端が低下するにつれて高潮風波の難も累加したことが考えられる。

次に戦国末期の潮土居線に立地する集落の発生発達の観点から考察すれば、東部の干潟発達の最も旺盛な犬井道は既に天文年間の末、鹿ノ江の内村として集落の萌芽(あるいは出小屋、納屋)が想像され、『正保絵図』(正保四年—一六四七)には犬井堂村(八一〇石余)に発達し、近くに小籠(現在小々森)が現れている。西するに伴い、干潟の成長が漸減して集落の立地を見ないが、福富潟に防護された芦刈町西南部に永田ヶ里村(六〇九石余現在永田)がある。その後五五年を経た『元禄絵図』(元禄十四年—一七〇一)には、同堤防線に広江、住吉、大野、丸目、久富などの新集落が現れ、芦刈町では土居外に福満(現在弁財)の記載がある。

以上の通り、多角的な観点から総合的に検討して判断すれば、潮土居としての松土居の構築は地区的に時間的差異があるが、東部の犬井道一帯が最も早期に実現して、おおむね寛永初頭(一六二五頃)、これに次いで西部の芦刈町永田前面も寛永初頭、中間の久保田、嘉瀬、西与賀地区は若干おくれいていると思われるが、おそくとも寛文五年(一六六五)以前と推考される。したがって佐賀平野における松土居の築立^{つた}ては、全般的に言えば寛永から寛文初頭の間と言えるであろう。ただここで注意を要することは、東部及び西部地区の松土居外側に肩接する干拓地で、元禄年間の築造と推定される干拓地が多いことである。もっとも元禄年間には干拓事業の盛んな時期で、白石平野の五千間土居(松土居・本土居)側にも多く見られるが、これは松土居の築造後元禄に至る間、堀^{かほ}の築立がほとんど停滞したわけではなく、低位の干潟に進出した干拓地が、度々高潮風波のために潰滅して「破れ堀」となり、その後干潟の成長を待つて元禄年間に再興されたものと判断するのが妥当である。

8 幕末明治初頭の線

江戸時代はわが国の土地開発史上一時期を画するもので、幕府諸藩の殖産興業政策の重点が、新田開発と生産力の増強、農業労働力の確保、農作物の多様化に指向されたことは周知の通りである。したがって、自然条件に恵まれたわが佐賀藩は、殖産興業政策の一環として、とくに天明以後有明海沿岸の干拓を強行したが、佐賀藩干拓の一特色は熊本藩の大規模干拓と全く対照的で、極めて零細な農民干拓の集積にある。すなわち江戸時代有明海沿岸に約六千三百町、五百か所の干拓地があるが、その約六〇パーセントは五町以下の小堀

である。もっとも藩財政の強化を目的として、天明三年（一七八三）藩の殖産興業機関として六府方が設置され、その一部局として干拓事業を担当する堀方を設けたが、そのおもな任務は農民干拓を指導援助し、零細な小堀の集積後、防潮堤防（潮土居）を補強して小堀集団の保全を計るにあった。このことは前記の中、藩営干拓は六か所約四百町にすぎないことを見ても明らかである。この原因は藩庫に開発の資力乏しく、また商人資本の接触を禁じ、自作農増設を計る以上、農民自体の零細干拓の推進にならざるをえなかったのである。

藩当局の積極的な干拓政策により、農民たちは同志を糾合して堀の築立てに努めたが、当時農民の干拓組合長を「舩頭」と言い、組合員を「堀子」と呼んだ。この呼称は明治以後の組合干拓においても同様である。舩頭とは「もやあがしら」のことで「もやあ」とは佐賀方言で共有または共同の意味である。今日武平堀、清兵衛堀のように、個人名を付した干拓地が数多遺存するのは右の事実を物語るもので、堀の築立てに当り、舩頭の労苦を多としてその名を後世に伝えんとするものである。しかし、中には干拓組合と言うほどのものではなく、極めて少人数が共同して築いた一町内外の小堀もあって、五人堀、二人堀などの名称が遺っている。

佐賀藩では江戸時代の中期頃までは、おもに土居心を欠く土堤であるが、天明以後は重要堤防や風波の当りの強い個所には土居心を用いた。土居心は比較的に潟土の固い潟土居に沿って松丸太を五尺間隔ほどに打ち込み、これに粗朶や竹材を堀めつけて柵造った。しかしこの土居心に直ちに土盛りをするのではなく、このまま五年乃至十年放置して、柵内に遊泥の堆積を促進し、干潟が成長して浜菜や芦を生ずる程度になると、

小潮時に組合総動員で土盛りを行った。なおここで一言しておきたいことは、天明の六府方設置以後、干拓地に堀名を用いたのではなく、天明以前の松土居外側に肩接する干拓地もほとんど堀名であり、また天明以後の干拓地でも土居心を欠く堀があることである。

江戸時代の干拓（想像図）



（千手原図）

佐賀藩で潮土居に最初石垣を用いたのは『疏導要書』（天保

五年南部長恒著）に正徳の嵐（正徳五年―一七一五）の後、佐賀郡東与賀町大野前面の松土居にこの記事がある。しかし熊本藩ではすでに慶長十年（一六六五）加藤清正が玉名の小田牟田新地八百町の干拓に石垣（石塘）を設け、柳河藩では延宝五年（一六七七）普請役今村五郎兵衛が石堤をもって黒崎開二百余町を築造し、諫早では幕末の安政年間（一八五四―一八五九）に至って、領主が南目大開に石堤を用いた。しかし幕末期には干拓規模の拡大に伴い、一般的に石堤を用いるようになった。

今日松土居外に展開する広大な美田は、真に藩当局の熱意と農民の血と汗の結晶とも言えるべきもので、人柱の伝説さえ遺っている所もある。幕末明治初頭に至る平野の進展は松土居から水平距離的に、川副町では無税地堀の先端まで約二・二キロメートル、東与賀町では授産社堀の先端まで約一キロメートル、



佐賀平野地先の干潟景観

難の状況にあると聞く。

○主な参考文献

- 『慶長年中肥前国絵図』
- 『元禄十四年肥前国絵図』
- 『疏導要書』南部長恒
- 『筑後川下流平野の開発』米倉二郎
- 『佐賀県干拓史』佐賀県耕地協会
- 『有明海干拓の展開過程』千手正美執筆・九州農政局
- 『有明干拓史』右共同執筆

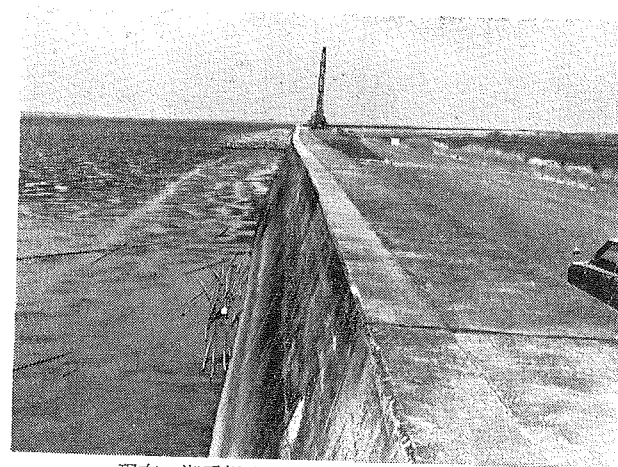
注

- ① 川副町の『威徳寺記』には年月日の記載はなく「園田次郎与市之押桶ニ而御上り」とある。
- ② 園田家に伝わる判物板札は現在県立博物館に所蔵されている。
- ③ 福富潟及び久保田潟の一部

久保田町では旦那様潟（二名江戸潟）の先端まで約〇・八キロメートル、芦刈町では社潟（授産社潟の略称）の先端まで約一キロメートルで、干拓地の先端はおおむね小潮平均高潮位一・三メートルまで進出している。

9 現在の潮受堤防線

前記の幕末明治初頭の線から約百年後の現在、川副町では国造潟の先端まで約一・六キロメートル、東与賀町では大授潟の先端まで約一・二キロメートル、久保田町では久保田干拓の先端まで約一・四キロメートル進展して、干拓地の先端はおおむね海拔〇・三メートル乃至〇・五メートルに進出し、杵島郡有明干拓有明工区の先端は〇線以下のところもある。しかも自然の営力による干潟の成長は日夜たゆまずして漸次上昇し、大授潟及び久保田干拓地区では、前面に計画中の佐賀干拓地区の干潟上昇のため、背後干拓地の排水困



現在の潮受堤防（佐賀郡東与賀町大授潟）